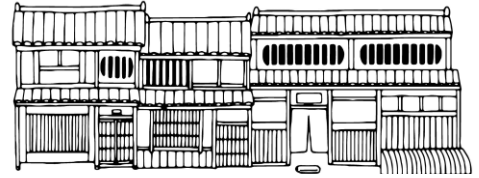


六郷川を徒歩で渡り、川崎宿を歩く

2023.4.22

酒井 郁子 記



「待ちに待ったり、本日は六郷川渡って旧東海道・川崎宿をじっくり歩きますよ!」

朝 9:30、六郷土手駅近くの北野天神(通称 止め天神)に集まり、この日の探訪はスタート。土曜開催にもかかわらず、総勢 33 名と沢山の方にご参加いただきました。

この企画は、3 年前の令和 3 年 1 月に予定されていました。ところが... コロナ感染拡大による緊急事態宣言(2 回目)が発令され、やむを得ず中止に。再設定された同年 5 月も 3 回目の緊急事態宣言で、泣く泣く 2 度目の中止という憂き目に。このコースは川崎の街中を歩くので、用心に用心を重ね 2 年間の熟成期間が置かれました。

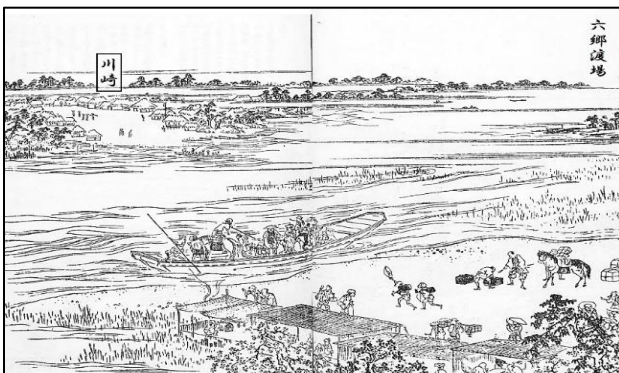
川崎は、東海道の中では 2 番目に遅く設置された宿場。街道整備が完了した慶長 6 年(1601)にはこの宿場はなく、幕府からの要請で元和九年(1623)に設置されました。驚いたことに、今年が川崎宿誕生からピッタリ 400 年。満を持して訪ねたこの日は、400 周年を祝う記念式典が行われる日に当たりました。

コースの最初は、東京都側から多摩川にかかる六郷橋を渡って川崎宿へ。浮世絵にも描かれた有名な“六郷の渡し”があった場所です。しかし、川崎宿が出来た当初、長さ111間(約202m)・幅4間2尺(約8m)の大橋が掛けられていたそう。細くて長〜い木製の橋の渡り心地はいかばかりか? そんな想像を巡らしながら、安心して渡れる現代の六郷橋(長さ444m、幅34m)を歩きました。

川崎宿に入ると、奈良茶飯で有名な万年屋跡、農政家として著名な田中丘隅を輩出した本陣跡、中世・河崎庄の鎮守社であった稲毛神社、江戸期からの古刹などの史跡を廻りました。しかし、大都会となった川崎の街には、残念ながら歴史の香を漂わす建造物はほとんどなく、説明版が設置されているだけです。砂州にできた雑地を、旅人で賑わう繁盛宿へと変貌させるまでには、六郷川の氾濫と戦い、財政困窮を乗り越え、宿場の人々はさぞ苦勞したでしょう。

そして旅の最後は、八丁噺駅ちかくの芭蕉の句碑を拝見。川崎宿の京口を出たところには、八丁(約 870m)もある真っすぐな噺(あぜ道)。辺りは刈り取られたばかりの一面の麦畑。老年の芭蕉と弟子たちは、別れを惜しみこの場で句を詠みあった。そんな情景を想像しながら、半日旅の終わりとなりました。

(参加者 33 名)



『江戸名所図会 巻 1』より、「六郷渡場」の図 (218 コマ)

※出典:国会図書館デジタルアーカイブ ※筆者翻刻、色調調整



現在の六郷橋